
秋――洗心橋

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋——洗心橋

【Nコード】

N8597T

【作者名】

RAN

【あらすじ】

ある港町の遊女の悲しい運命。

※サイト、dノベ転載。

せめてこの先は、心を洗って、家へ帰ろう。
ここに来る客は、そう言って帰る。

この遊郭に来る途中に、橋がかかっていた。
だいたいは、その橋を渡って遊郭に来る。

だからその橋が、あの世とこの世を分けるように、遊郭と街を分ける存在となっていた。

私は、そうして橋を渡っていく客を、いつも見ていた。

私は、橋の向こうの世界に憧れていた。

「私は向こうの世界へ戻りたいの!」

「お前がカタギに戻れると思ってるのか!」

何度となく、店の主人とケンカした。

そうしていくうちに、みんなに白い目で見られるようになった。
仕事もなかなか回ってこない。

もう、この店に未練は、ない。

私は店を抜け出す決意をした。

どうしても、私は行きたかったから。

あの、明るい世界へ。

そして夜、私は部屋の窓からこっそり抜け出した。

誰にも見つからなかったようだ。

遊郭は夜が最も賑わう時間。

店の明かりが眩しく、人が多くいたが、逆にそれにまぎれた。

しかし、夜の冷えは、病持ちの私を苦しめた。
昔から、息をするとたまに苦しくなることがあった。

ひどい時は、血を吐いた。

きつと、もう私は長くはない、とわかっていた。

遊郭にいる女性は、あまり日に当らない。

だから、体が弱っていくらしい、と医者が話していたのを聞いたことがある。

周りの姉さん方も、たくさん、そうして死んでいった。

だから、私ももうすぐ姉さん達と一緒に、死ぬんだと思っていた。
だけど、死ぬ前にあの橋の向こうへ渡りたかった。

私は、何とか力を振り絞り、終いには足を引きずりながら、橋へ向かった。

体は空気を求めているのに、なかなかうまく吸い込めない。

胸の辺りから、変な音がした。

そして、橋が見えてきた。

もう少し、あともう少しで、橋に着く！

私は気持ちが急いていた。

だが、体は思い通りにならない。

ゆっくりゆっくりと、橋に近づく。

この時間をもどかしい。

橋に着いた。

私は、そこからも、またゆっくりと歩きだす。

手すりに手をつき、息も絶え絶えに。

通り過ぎる人の好奇の目があったが、もう気にしていられなかった。

もう、橋が終わる。

懂れていた世界に、手が届く距離まで、来た。

あと、もう少しで、手が……！！

しかし、彼女は橋の上で、音を立てて倒れた。

その足は、遊郭を出ることはなかった。

出る数歩手前で、彼女は倒れてしまった。

だが、その手は、橋の外へと伸びていた。

そして、少しばかり橋の外に、指先が出ていた。

その橋を、ほろ酔い加減の男達が、通り過ぎていく。

心をきれいに洗って、温かいお家に帰りましょう。

倒れている彼女は、見向きもされない。

そして、次の日の朝には、彼女の体は橋の上には、なかった。

(後書き)

洗心橋↓北海道小樽市の地名。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8597t/>

秋――洗心橋

2011年6月7日04時28分発行